西光寺だより

第一五七号　令和五年　九月一日発行

■今月のカレンダー■

「まこと」のひとかけらもない私に
仏さまから差し向けられた「まこと」

私の古くからの友人は、今６８歳。

彼は、おじいさん、おばあさん、そしてご両親のお育てで、幼少の頃からお寺参りをしていました。その後進学、就職、結婚と順風満帆の生活でしたが、５０代のはじめにお連れ合いの重い病気、ご両親のご往生といったことが続きました。

彼は、悲しみは大きかったけれど、すべてお聴聞の中で聞かせてもらった『諸行無常』のことわりだったと受け止め、乗り越えてきました。

お連れ合いの病気もほぼ全快しましたが、６３歳のとき、今度は彼自身が脳梗塞で倒れ、一命はとりとめたものの、左半身に麻痺が残り歩くには杖が必要な体になりました。そんな彼に、今月の言葉を読んでもらい感想を求めました。

しばらく沈黙の後、

「自分はまことのひとかけらもない凡夫であるということが今はっきりした。今までのお聴聞の中で凡夫ということについて、聖徳太子や親鸞さまのいくつかのお言葉を聞いてうなずきはしていたけれど、直接に自分とは結びついていなかった。まことのひとかけらくらいは持っていると思っていた。

歩くのが不自由になった頃は、外出するのがいやで家の中ばかりで過ごしていた。そんなときに妻はしきりに外出をすすめ、励ましくれたが、そんな妻に感謝するどころか当たり散らしてばかりいた。

ようやく重い腰を上げ、外出するようになると、さまざまな人たちが手伝ってくれる。ありがとうと感謝の気持ちを伝える。

しかし、少し慣れてかなりのことが自分でできるようになると、手伝ってくれた方にありがとうとお礼は言うものの、心の中では、少し時間がかかるがこれくらいは自分でできる、もう少し見守ってほしいと反発している。

ときには、余計なお世話だと心の中で叫んでいる自分がいる。ありがとうの言葉と裏腹に、相手を非難している。」

というような返答でした。

また、随分前に次のようなことを聞きました。

その人は、若いときから解放運動に携わり、私たち真宗僧侶に、

「今のままの社会でいいですか？親鸞聖人のすべての人びとは平等であるという考え方である同朋精神に立ち返りましょうよ。」

と、熱く訴えてくださる方でした。

その彼があるとき、沈んだ声で、「私は人を差別する人間を最低と言ってきたし、自分は人を差別などしないという自負があった。けれど周りの人達に対して知らず知らずのうちに、軽視することばを投げかけ、傷つけていたのです。」と言われました。

お二人は、ご自身の心の底をちゃんと見据え、言葉にしてくださいました。そして、その仏さまから差し向けられた「まこと」の言葉が私の誤った姿勢を教えてくださいます。

私自身を振りかえってみると、自身の発言や行動を、常に状況や相手の言葉が「そう言わせた。そうさせた。」と言い訳ばかりしていたことが、恥ずかしくなります。

差別の現実と向き合い、「仏さまのまこと」をもっと、もっと学んでいきたいと思います。

（法語カレンダー　解説書より）

◆先月の報告◆

八月十五日（火）１８時より西光寺本堂にて盂蘭盆会法要を厳修致しました。お越しいただいた皆さまとともに仏説阿弥陀経のお勤め、お焼香を致しました。

今年のお盆は台風の影響で残念ながら帰省やご旅行を断念しなければならない方も多くいらっしゃったようです。そんな悪天候の中、法要が滞りなくできましたことに感謝いたします。

毎年のことをすることの大切さ、そして、亡き方のおかげで今があるいのちの学びを、こうしてお仲間である皆さまとともに過ごした時間でありました。

皆さまありがとうございました。

◆十・十一月の行事◆

・十　月　三　日（火）

秋季永代経法要

午後二時・午後七時

西光寺本堂

◎　本願寺派布教使　宮部　誓雅　師

・十一月　二十三日（木）

報恩講法要

午後二時・午後七時

西光寺本堂

※　講師は調整中。

浄土真宗本願寺派　白毫山　西光寺

大阪府茨木市西河原一―七―二

電話　〇七二―六二二―四七九四

FAX　〇七二―六二二―九二九一

http://www.osaka-saikouji.net/